

# Can-Do Statements のパイロット調査と分析

小 山 由 紀 江

## 1. 始めに

Can-do statements は言語能力を自己評価する指標の一つとして、近年注目を集めているが、その代表的なものが Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (2001) (以下 CEFR) に詳述されている Common Reference Level の能力記述文である。CEFR は Council of Europe (以下「欧州評議会」) によって定められた、ヨーロッパの言語教育のガイドラインであり、2001年に上記のタイトルの本の形で出版されたが、この制定にはヨーロッパの言語文化的そしてさらには政治的経済的な背景が大きく関係している。

欧州評議会は1949年に発足したヨーロッパ最古の政治組織であり、当初はベルギー、フランス、イタリア、ノルウェー、スウェーデン、イギリスなどの10カ国であったが、現在はハンガリー等の中欧やウクライナ等の東欧、及びトルコなど全部で46カ国が加盟している。ちなみに日本はこの欧州評議会の非欧州オブザーバー 5 カ国の内、唯一の東アジアの国である。(参照 Council of Europe 公式サイト <http://www.coe.int/>)

この公式サイトによると、欧州協議会の目的は以下のように表されている。

### Aims

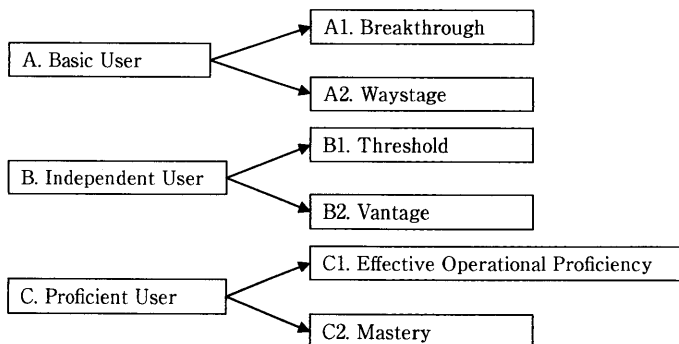
The Council was set up to:

- defend human rights, parliamentary democracy and the rule of law,
- develop continent-wide agreements to standardise member countries' social and legal practices,
- promote awareness of a European identity based on shared values and cutting across different cultures. (下線部筆者)

ここに掲げられた目的のうち、言語教育に最も関係するのは最後の下線部分、すなわち「価値の共有と異文化の横断」ということであり、これは言語の使用を通してのみ可能となる。(Morrow, 2004, p.4) この観点から欧州評議会は1960年以降言語教育に関して積極的に様々な活動を展開し、その1つの結果として1975年には van Ek による *The Threshold Level* が発表された。これはヨーロッパにおいて言語学習者が日常的コミュニケーションをとるために最小限満たすべき言語能力を規定したものであり、その2年後さらに下のレベルとして *Waystage Level* が発表された。これらはさらに改訂されて、*The Threshold Level* の上のレベルの *Vantage* と共に2001年にまとめて出版された。(van Ek & Trim, 2001) このような長年に渡るプロジェクトの遂行の結果、ヨーロッパ諸国において横断的に言語を使用する場合に必要とされるコミュニケーション能力として6つのレベルが設定され、その内容が CEFR として2001年に発表されたわけである。

## 2. CEFR の概要と Can-Do Statements の研究

CEFR は以上のような経緯を経て制定されたが、その内容は以下の図のように大きく3つのレベルから成り、またそれぞれがさらに2つのレベルに分けられている。A. は基礎的レベルで A1が最も低く、B. は自立的な言語運用ができるレベル、そのうち B1が上記の Threshold、B2が Vantage である。また一番上の C レベルは堪能な言語使用者として C1レベルと native speaker 並みの運用能力を持つ C2に分けられている。



学習者の言語能力がこれらのレベルのどれに相当するかを評価する際に用いられるのが、「～ができる」という can-do statements であり、例えば "Can understand and use familiar everyday expressions and very basic phrases aimed at the satisfaction of needs of a concrete type." (A1レベルの指標) (Council of Europe, 2001, p24) のような形式のものである。

わが国でも以上で述べた CEFR の動きを受けて、この 2-3 年、日本語、英語、ドイツ語などの学習者が適切に自己の言語能力を把握するための can-do statements を制定するプロジェクトや研究が始まっている。根岸 (2005) は英語の Writing 能力の can-do statements の自己評価と実際のパフォーマンスを比較してその妥当性を検証し、e-mail を書くことに関して自己評価が低いという結果を得た。また、野口等 (2004) は日本語能力を評価する can-do statements を IRT 多値型モデルを使って分析し、適切な can-do statements リストの作成を試みている。CEFR と同様、到達段階の参照基準として can-do statements を用いた調査としては長沼・宮嶋 (2006) が行った「清泉アカデミック Can-Do 尺度の開発とその評価」がある。ここでは can-do statements に対する回答が抽象的な段階的なスケール (例:「簡単に出来る」「大体出来る」) ではなく、以下のように具体的に記述されている。(「清泉アカデミック Can-Do 尺度」より抜粋)

#### A. speaking

① 高校の教科書レベルの短いテキストを読んで、その内容を英語で説明できる

- a. テキストやメモを見ながらでも、説明するのが難しい
- b. テキストやメモを見ながらであれば、何とかゆっくり説明できる
- c. テキストを見なくても、メモがあれば大体説明できる
- d. テキストやメモを見なくても、大体説明できる

このように「清泉アカデミック Can-Do 尺度」では、スケールを具体的に記述することによって、学習者も can-do statements を学習目標として認識できるような工夫がされている。

以上、CEFR を中心とする近年の can-do statements に関わる状況と研究の動向に関して概観的に述べてきたが、以下、名古屋工業大学における can-

do statements のパイロット調査の結果について、TOEIC の結果と比較しながら論ずることにする。

### 3. 研究の目的

本研究においては、パイロット調査として実施した名工大 can-do リストの回答結果と、TOEIC の結果を比較分析することにより、まず学生の回答傾向を明らかにする。さらに、名工大 can-do リストが学生の英語能力を自己評価する役割を適切に果たすものであるかどうかを検討し、can-do リストの内容及び実施方法に関して改善すべき点を明らかにする。以上の2点が本研究の目的である。

## 4. 名工大 can-do リストと TOEIC の概要

### 4. 1. 名工大 can-do リスト

can-do statements は前述したように、言語能力の評価上重要な役割を持つものであるが、ここでは名工大で実施した can-do statements (以下「名工大 can-do リスト」) の概要について述べる。本学の場合、外部指標として関連付ける語学テストは TOEIC であるため、名工大 can-do リストは、TOEIC のスコア解釈のために開発された Can-Do Statements (TOEIC Can-Do Guide—Linking TOEIC Scores to Activities Performed Using English) を参考に作成した。スキルの分野も TOEIC の場合と同様、リスニング、リーディング、ライティング、スピーキング、インタラクティブ・スキルの5分野とし、各分野に15問の can-do statements を設定した。記述内容に関してはなるべく実際の大学生活に即したものにするため、大部分に修正を加えた。各質問の回答は「1. まったくできない」から「5. 簡単にできる」までの5段階のスケールとした。(P.94の結果の表における数値は、1. と回答した場合は1ポイント、2. と回答した場合は2ポイント、以下同様に回答を数値化したものである。) また、質問の最後に「この can-do statement に回答することによって自分の英語力を自己評価することができたと思うかどうか」という質問を加えたため、調査は全部で76問となった。なお、本稿の末尾に、参考資料として、名工大 Can-do リストを付しておく。

## 4. 2. TOEIC テスト

TOEIC は Test of English for International Communication の略称で、アメリカの非営利テスト開発機関 Educational Testing Service (ETS) によって開発されている国際コミュニケーション能力を測定する標準テストであるが、現在では1年間の日本での受験者が約150万人（2005年データ）という国内で最も受験者数の多いテストである。公開テストでは2006年より一部の問題形式や内容が変更されたが、団体受験用の TOEIC IP テストは現在の時点では従来と同一の形式・内容である。本学では1年生の入学時と1学年の終了時に1回ずつ、合計2回のIPテスト受験を義務付けている。周知のことであるが、TOEIC IP の構成を念のため明記しておく。

### 〈TOEIC IP の構成〉

Section I	Part 1-4	Listening Comprehension	100問	45分	計120分
Section II	Part 5-7	Reading	100問	75分	

## 5. can-do リスト調査と TOEIC の結果と考察

### 5. 1. 両調査の実施について

TOEIC IP（以下「TOEIC」）は前述のように1年生に対して入学時と1年の最後に実施している。ここで考察の対象とするのは、2006年4月の入学時に実施した TOEIC の結果と、同10月に実施した名工大 can-do リストの調査結果である。TOEIC は原則的に1年生全員（約900人）が受験しているが、can-do リストの調査に関しては、今回はパイロット調査であることから、計266人を対象とした。調査対象を限定するに当たって、全体的傾向を見るために、TOEIC の結果によってクラス分けされた、上級クラス、中級クラス、基礎クラスのすべてのレベルを含むことに留意した。被験者の内訳は、基礎クラス73人、中級クラス145人、上級クラス78人である。なお、上級クラスは、他のクラスに比べクラスサイズが小さく（25人前後）、教員は全て英語のネイティブスピーカーである。また、夏季と春季には同じくネイティブスピーカーによる英語の集中講義を受けており、授業関連では、实际的に英語を使用する機会は中級・基礎クラスに比べかなり多いと言えよう。なお、こ

の can-do 調査は授業時間内に行ったもので、所要時間は約20分である。

## 5. 2. 両調査の結果と考察

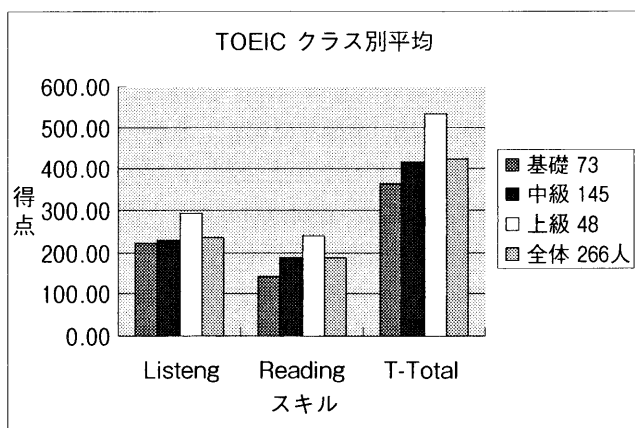
以下の表は、TOEIC と can-do 調査の結果を上級、中級、基礎のクラス別に示したものである。数値はいずれも各項目の平均値である。

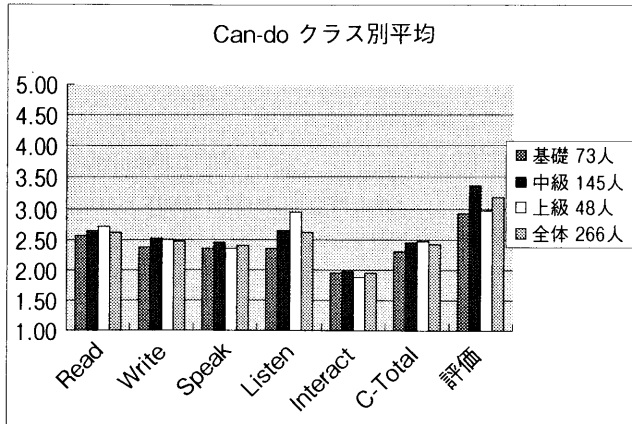
〈TOEIC と Can-Do 調査の結果〉

クラス	TOEIC			CAN-DO						
	Listen	Read	T-Total	Read	Write	Speak	Listen	Interact	C-Total	評価
基礎 73人	219.45	143.84	363.29	2.55	2.37	2.35	2.34	1.96	2.31	2.92
中級 145人	228.03	189.28	417.31	2.63	2.50	2.44	2.63	1.98	2.44	3.37
上級 48人	293.54	238.44	531.98	2.69	2.49	2.35	2.94	1.88	2.47	2.96
全体 266人	237.50	185.68	423.18	2.62	2.46	2.40	2.61	1.96	2.41	3.17

(注:can-do の最後の「評価」は、76問目に付加した「この調査で自己評価ができたと思うか」という項目である。)

クラス別の違いがより明確になるように、この表をグラフにしたものが、以下の二つのグラフである。





TOEIC クラス別平均のグラフを見ると、リスニングよりリーディングのセクションにおいてクラスによる差があることが解る。また Can-do クラス別平均のグラフを見ると、以下の4点が明らかとなった。

- 1) ライティング、スピーキング、インタラクティブ・スキルの三分野において上級と中級の自己評価が逆転しており、インタラクティブ・スキルに至っては上級者の自己評価の平均が基礎クラスより低い結果となった。
- 2) リーディングとリスニングについては、上級クラスの自己評価が最も高いが、クラスによる差が最も大きいのはリスニングである。(リーディングとリスニングがクラスの順番と一致しているということから見ると、これらの自己評価は TOEIC で測られている能力の2分野、即ちリーディングとリスニングに対応しているとも考えられる。)
- 3) 5つの分野の全体の平均値を見てみると、僅差ではあるが、上級クラスが一番高く、次いで中級クラス、基礎クラスという順番になっている。
- 4) 最後の「can-do リストに回答することによって自分の英語力を自己評価することができたかどうか」という問いに対しては、中級クラスの平均値が最も高く、次いで上級、基礎であるが、これら二つの差は僅少である。

次に、被験者266人全体の TOEIC の得点と can-do リストの相関を調べて

みた結果が以下の表である。この表では、比較的相関の高い部分（四捨五入して0.7以上）を網掛けにしてある。

〈TOEIC と Can-do リストの相関〉

		TOEIC			Can-do					
		Listen	Read	Total	Read	Write	Speak	Listen	Interactive	Total
TOEIC	Listen	1	0.3357	0.8094	0.1044	0.0883	0.0364	0.3026	-0.03	0.1178
	Read	0.3357	1	0.8249	0.1452	0.1006	0.031	0.3095	0.0028	0.1378
	Total	0.8094	0.8249	1	0.1532	0.1157	0.0412	0.3745	-0.016	0.1566
Can-do	Read	0.1044	0.1452	0.1532	1	0.6293	0.5979	0.5991	0.5708	0.794
	Write	0.0883	0.1006	0.1157	0.6293	1	0.8093	0.6212	0.6942	0.8868
	Speak	0.0364	0.031	0.0412	0.5979	0.8093	1	0.6548	0.752	0.9
	Listen	0.3026	0.3095	0.3745	0.5991	0.6212	0.6548	1	0.5828	0.815
	Interact.	-0.03	0.0028	-0.016	0.5708	0.6942	0.752	0.5828	1	0.8492
	Total	0.1178	0.1378	0.1566	0.794	0.8868	0.9	0.815	0.8492	1

この相関係数の表から以下の3点が明らかとなった。

- 1) TOEIC の得点同士（リーディングとトータル）また can-do リストのポイント同士（スピーキングとライティング、インタラクティブ・スキルとライティング、それにトータルと各5分野）の相関係数が当然ながら高い。
- 2) 1) を逆の視点から見たものであるが、TOEIC と can-do リストとの相関は、おしなべて低かった。しかし、その中では TOEIC のトータルと can-do リストのリスニングの相関が最も高く0.3475であった。
- 3) Can-do リストのインタラクティブ・スキルは5分野の中では TOEIC との相関が最も低く、リスニングとトータルは相関がマイナスという結果となった。

## 9. 結論

以上、本研究で行った Can-do リスト調査と TOEIC の結果を分析し、クラス別の回答傾向や、二つの結果の相関について論じたが、ここでは、全体



として明らかになった点をまとめておく。

- 1) 全体として can-do リスト調査と TOEIC の結果との相関は低い結果となった。
- 2) 全体として reading, listening という passive なスキルについての自己評価が比較的高く、speaking, writing という productive なスキルは低い。
- 3) 2) ととも関連するが、interactive スキルに対する自己評価は1.96と5分野のうち最も低い。
- 4) 5分野全てを通して、自己評価が低いのは、専門性・抽象性の高いもの、negotiation や問題解決が必要とされる項目、である。

1) に関しては、TOEIC の点数によってクラス分けされた上級クラスの学生による自己評価の平均値が、中級クラスよりも低い分野が2分野もあることも、要因となっている。自己評価が外部評価としての TOEIC の結果と必ずしも一致していないこの現象は、5. 1. で述べたように TOEIC の点数の上位者ほど授業中などに実地的なコミュニケーションの場に立つことが多く、困難に直面することも多いという事実に一因があると考えられよう。このような学習状況の違いから、上級クラスの学習者は自己の能力を低めに評価する傾向が出るのではなかろうか。上級クラスの学習者は想像ではなく経験したことを基に回答しているが、他方、中級・基礎クラスの学習者は経験したことのない項目も多く想像だけで回答する場合が多いために、自己評価に正確さを欠くといった可能性も否めない。

上述のように、名工大 can-do リストにはいくつかの問題点があるため、意味のある自己評価に役立てるためには、何らかの改善する必要がある。以下、名工大 can-do リストの自己評価フレームとしての妥当性を高めるために、この調査を通して明らかになった、内容や実施の仕方に関する改善すべき点をまとめておくことにする。

#### 〈今後改善すべき点〉

- 1) 項目数：項目数を削減する。全体で75問は項目数が多すぎて、最後まで正確に回答できない可能性がある。
- 2) 内容：今回は TOEIC のスコア解釈に関連させるため TOEIC の can-do statements をベースにしたが、内容をカリキュラムのコース目標

と合致させて学習者が自己評価をしやすいものにする必要がある。また、経験の有無を問う項目を設け、経験者があまりに少ないものは除去するなど、項目の精選も必要である。

- 3) 実施時期：TOEIC テストと can-do リスト調査の時期がずれていたため、その間に、学習者の能力や意識が変化した可能性がある。出来るだけ近い時期に行うべきである。

Can-do statements の妥当性や信頼性等、その評価については、外部の語学能力試験との関連付けを含め、検討すべき課題はまだ数多くある。しかし、語学教育のカリキュラムを決定したり教科書や試験を作成する際に、学習者の能力評価と目標設定のための共通の基準作りは英語教育に従事する者にとって必須事項であろう。そのような状況において can-do statements の果たす役割は、今後ますます大きくなると考えられる。その意味でも、より妥当性・信頼性の高い can-do statements を作成し、それを実施していくことは、英語教育の成功の鍵としてクリアすべき重要な課題であると言える。